
修学旅行

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修学旅行

【NZコード】

N9428M

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

リトルバスターズのエンディング後の、アフターストーリーです。

リトルバスターズのメンバーが修学旅行に行きます。
ネタバレあります。

(前書き)

ネタバレあります。『注意ください』。

僕達の目の前には透き通るほど青い海が広がっていた。

女性陣がその光景を『綺麗』とわかりやすく形容し、感嘆とした声を上げた。

既に夏に入っているといつのに浜辺には人気がなく、貸切といつてもいいくらいだ。

恭介が帰ってきてから、僕達はあの時できなかつた修学旅行をすることにした。

道中の運転をしたのは免許を取つたばかりの恭介だった。

僕達は一度身支度の為に寮に戻り、準備をしてからこの海へ向かつた。

恭介は免許を取つたばかりだといつに、白いワゴン車を危なげなく運転していた。

「けど、恭介。こんな良い所なのになんか人がいないよ」

僕は恭介に訊いた。

「穴場つてやつだ」

恭介は胸を張つて答えた。

きつと、この修学旅行を楽しめるよつとする為に、苦労したのだろう。

「まあ、とにかく泳ぎまようよ」

そう提案したのは葉留佳だつた。

泳ぎたくてうずうずしているよつだ。

他のメンバーも同じようだ。

「よし。あまりはしゃぎすぎきて怪我をしないよ」

恭介が皆に告げると、既に服の下に仕込んでおいたのだらう。その場で服を脱ぎ出した。

「見よ。この肉体美！」

服を脱ぎ競泳用の海水パンツになつた真人はいつた。日頃から鍛え

た筋肉が露に

なるが、僕の注意は別の所にあった。

まず、小毬さんだ。

フリルのついた可愛らしい水着。

子供っぽい、いかにも小毬さんが気そうな水着だ。

そして、童顔からは想像できないほど胸部が発育していた。

「ふえ、理樹君。私の水着、変？」

小毬はおどおどとし、訊いた。

「なあに。理樹君は私達の半裸に欲情しているのだよ」

そう言つたのは来ヶ谷。黒を基調にしたビキニタイプの水着だ。布が覆つている部分は少なく、否応なくその豊満なバストが強調される。

「直枝さん。あまりやらしい目で見ないでください」

そういうたのは美魚。スレンダーな美魚によく似合つ白いワンピース。そしていつも通り、白い日傘を刺していた。

「別にそういうわけじゃ」

「神北さんと来ヶ谷さんの胸ばかり見て、説得力ありません」
僕が否定すると、美魚は軽蔑の意が籠つた、見透かしたような目で僕を見てそういった。

「やつぱり理樹もおっぱいの大きい人が好きなんでしょうか？」
そう訊いたのはクド。白い学校用の競泳水着だ。ボディラインが平坦で幼児的な

クドによく似合つている。

「心配ないよ、クド公。あんたみたいのを好きな人もいるから」
そういったのは葉留佳。アクティブな印象の葉留佳によく似合つた活動的なビキ

二タイプの水着である。

「理樹」

最後に鈴。

僕はその姿に見とれた。透き通るような鈴の肌にあつた白いビキニ。

それは鈴の整つたプロポーションを強調しているようだつた。

「……やっぱり、似合わないか？」

鈴は不安げな表情で尋ねた。

「そんなことないよ鈴！よく似合つてゐよ！」

僕は勢いよくかぶりを振つた。

「ほんとか？」

「ほんと、ほんと」

僕は何度も頷いた。

鈴の姿に、僕の胸は高鳴つた。

「それで、何して遊ぼうか？」

僕は恭介、真人、謙吾の三人に尋ねた。

三人とも海パン姿である。

他の一人はカラフルなトランクスタイルだった。

「筋肉さんがこむらがえつたビーチバージョンをやるのはどうだ？」

「おお。それはいいな」

真人が提案すると、謙吾が賛同した。

「別にいまここでやる必要はないでしょ」

僕は溜息を吐いた。

大体、筋肉さんがこむらがえつたつてどんな遊びなのさ。

ダルマさんが転んだ、みたいなやつなのかな・・・。

「そうだな。ここは俺達リトルバスターZらしく、なにかしらの競技性を持たせるべきだな」

恭介はそう提案した。

そしてしばし悩み。

「ビーチバレーなんてどうだ？」

「けど、コートがないよ」

僕はそう指摘した。

「だったら、ビーチドッジだ。これなら、棒で地面に線を引くだけ

で出来る。ボールはただのビーチボールを使えばいい

「そうだね。筋肉さんがこむらがえつたよりは良さそうだね」

「理樹、お前は筋肉さんがこむらがえつたの本当の魅力を知らねえ」

「僕の台詞が気に入らなかつたのか、真人がそう食いついてきた。

「血わき肉踊り、子供からお年寄りまで、皆が楽しめる。それが筋

肉さんがこむらがえつただ

だから、どんな遊びなのさ。

「そうだな。やつぱり筋肉さんがこむらがえつたにするか」

突然、そう恭介はいつた。

「ええ！？ 恭介」

僕は驚愕し、声を上げた。

「おお。話がわかるじゃねえか。恭介」

そう興奮して言つたのは当然真人。

「俺も常々、筋肉さんがこむらがえつたはハイセンスなスポーツだ

と思つていたんだ」

「へつ。やつと恭介も筋肉さんがこむらがえつたの魅力がわかつた

か」

真人は感慨深げだ。

「ああ！やろうぜ！俺達で暑い夏の筋肉さんがこむらがえつたを！」

「そうだな。俺達で燃えあがるような筋肉さんがこむらがえつたを

！」

恭介に続き、謙吾がいつた。

「理樹もやるよな？」

恭介は僕に訊いた。

「え・・・・・・ああ。うん」

僕は渋々頷く。

「リトルバスターズ全員を徵集しろ。これより『リトルバスターズ第一回、筋肉さんがこむらがえつたシーサイドバージョン』をはじめる！」

恭介は高々と宣言した。

結局、夏の浜辺で筋肉さんがこむらがえったをメンバー全員でやることになった。

どんな遊びだったかは詳しくは言えない。
ただ、凄く疲れたのは確かだ。

「ひゅう。楽しかったな。筋肉さんがこむらがえった
恭介は満足げだ。

「だろ。恭介。またやるつぜ。筋肉さんがこむらがえった」
真人も満足げに言った。

「やつぱり、夏にやる筋肉さんがこむらがえったは最高だな
謙吾も満足げだ。

「面白かったねえ、筋肉さんがこむらがえった
小毬も満足げだ。

「はい。最高でした。やつぱりいいですねえ。筋肉さんがこむらが
えった」「

クドも満足げだ。

「お姉さんも大満足だよ。筋肉さんがこむらがえった
来ヶ谷も満足げだ。

「悔れませんね。筋肉さんがこむらがえった
美魚も満足げだ。

「最高でしたよ！筋肉さんがこむらがえった
葉留佳も満足げだ。

「なかなかやるな。筋肉さんがこむらがえった。楽しかったぞ。な
理樹」

鈴も満足げで僕にそう訊いた。

「ああ……なかなか壮絶だったね。筋肉さんがこむらがえった
僕は投げやりに呟いた。

「残りは自由時間だ。各人好きにこの海を満喫するよ！」

恭介は僕達にそう告げた。

「そこ」の少年

浜辺を歩いていた僕は来ヶ谷に呼び止められた。

来ヶ谷はうつ伏せになり、水着のホックを外した状態だった。

「サンオイルをぬつてくれないか？」

「え？ 僕が？」

「他に誰がいる？」

「え……けど」

「役得だぞ。お姉さんの肌を撫で回しながら、ハアハアするがいい」

結局、僕がやることになる。

僕はサンオイルを受け取り、それを手につけ、来ヶ谷の透き通るほど綺麗な肌に塗る。

手には心地よい感触。来ヶ谷の肌を、じっくり見られるのも確かに、役得だ。

「あつ。理樹君する」

そういうて葉留佳がこちらにやってきた。

「あたしにもやらせて」

「え？ けど……」

役得を放棄するのも何なので、多少の抵抗を試みる。

「いいじゃん。いいじゃん」

そういうて葉留佳は強引にサンオイルを奪い取る。と。

勢い余つて中身が飛び出した。

飛び出した中身は来ヶ谷の頭に飛び掛る。

来ヶ谷の頭にはオイルがたつぶりとかかった。

「あちや……ごめん、姉御」

来ヶ谷は水着のホックを元に戻し、立ち上がった。

そして、来ヶ谷は荷物からナイフを取り出す。いや、ナイフというより、短刀に近い。

「斬刑に処す」

「ぎやあああ。そんな、ナイフであたしをメタ斬りにしないでええええ！」

葉留佳は恐怖に慄き、全力で走り出した。

来ヶ谷は走り出した。あまりに速すぎて消えたように見える。きつと空間を足がかりに跳躍しているのだろう。

浜辺を歩いていると、クドと美魚を見かけた。

「なにやつてるの？」

僕は尋ねた。

二人は水気のある砂で何かを作っているようだ。

「あ。リキー。今美魚さんとお城を作っているんですよー」

「はい。私はあまり海ではしゃぐのは好きではないので、能美さんとじご一緒に緒しているのです」

二人は答えた。

「なかなか上手いね」

砂から作ったにしては、細部まで凝っていて、なかなかそれらしく見える。

美魚さんが器用だからだろう。

僕は邪魔をするのも何なので、その場を去ろうとした時。

ざばあ、という音と共に、大きな波が来て、砂の城を削り取つていつた。

「うう～お城が～」

「仕方ありません。今度は少し離れた所で作りましょう」

「二人は残念そうだ。

「僕も手伝うよ」

「リキー。いいんですか？」

「うん。楽しそうだしね」

「では、直枝さんにも手伝つてもいいましょ～」

僕も砂城作りを手伝うこととした。

「完成ですぅ～リキー ありがとうございます」

クドは大喜びの様子だ。

「ありがとうございます。直枝さん」

美魚は軽く頭を下げる。

「そんな、大したことはしてないよ」

皆で頑張ったおかげで、なかなか立派な砂のお城が完成した。

「鈴と小鞠さんは何は何をしているのだろう？」

疑問に思うと、小鞠は海で浮き輪を身につけて泳いでいた。

「理樹くーん！」

遠方から手を振り、小鞠は僕に声をかける。

僕は手を振り、それに答えた。

鈴はその近くで泳いでいるようだ。

犬搔きならぬ、猫かきといった感じだ。

しばらくして、大きな波が起きた。

波は小毬さんを飲み込んだ。

大きな波が消えた後は、小毬さんが見につけていた浮き輪だけが、水上に残されていた。

「鈴！ 小毬さんを助けて！」

僕は鈴に叫ぶ。

今のは波で、沈んだのかもしれない。

鈴は水中に潜り、小毬を捜す。

しばらくして、小毬を抱き抱えるようにして浮き上がってきた。

僕と鈴は、小鞠さんを浜辺に寝かした。

水を大量に飲んだのか、意識がない。

これは一刻を争う。

しかし、僕がやるのか。

気を失っている小毬さんの唇は、僕には艶かしく映る。

だけど、迷っている暇はない。

人命がかかっているんだ。

僕は意を決して、小鞠さんの唇に顔を近づけた。

「待て、理樹」

鈴は僕の頭を抑え、止めた。

「あたしがやる」

言つて、鈴は小毬に唇を近づける。

なんだろつ……この胸に残つた虚無感は……。

「うう……ん……」

鈴の人工呼吸の成果か、小鞠は意識を取り戻した。

「……あれ？ 理樹君？ 鈴ちゃん？」

小鞠は状態を起こし、尋ねた。

「良かつた。小毬さん」

僕は安堵の溜息を吐く。

「何だか……唇に感触があるんだけど……まさか、理樹君？」

小鞠さんは尋ね、自分で勝手に解放したのか、話を続ける。

「ひ、ひどいよ理樹君……いくら事故だったとはいえ。その……わたしのファーストキスを……うえーん、もうお嫁にいけない」

小毬は泣き出した。

「心配するな。小毬ちゃん。やつたのはあたしだ」

「なんだ……鈴ちゃんか。だつたら良かつた。これでお嫁さんが貰えるよ」

鈴が言つと、小毬さんは安堵したようだ。

お嫁さんが貰えるという表現を、あえて僕は気にしなかった。

小毬風のジヨークなのだろう。

しかし、女の子同士で唇を交わすというのは、妙に興奮する状況だつたな。

僕は胸中で呟いた。

「……溺れたのが、直枝さんだつたら良かつたのに」
僕の近くにいた美魚は残念そうに呟いた。

皆も心配したのか、近くに寄ってきた。

「もし理樹が溺れたら、俺が人工呼吸してやるぜ」
真人はいった。

「なにをいう。そういう時は俺の出番だ」

そういうのは謙吾。

「理樹……俺にして欲しいよな？」

最後に恭介は尋ねた。

「一人の男性の唇を求めて争う三人の男性達……素敵です」
美魚は恍惚とした様子だ。

僕は深い溜息を吐く。

「それで、恭介達は何をしてたの？」
僕は尋ねた。

「俺達か。俺達は夏の風物詩。スイカ割りだ」

恭介は答えた。

「理樹もやってみるか？」

恭介は尋ねる。

「そうだね。やってみようか」

「今は真人がやっている。理樹は次な」

真人は目隠しをして、棒を手に持ち何回か回り、ふらふらと歩き出した。

しばらく歩き。

「見よ。俺の筋肉を！」

叫んで、棒を振り下ろす。

振りおろした先には来ヶ谷がいた。

来ヶ谷は真剣白羽取りで、棒を受け止める。

「ん？」

異様な感触に、真人は疑問をもち、目隠しを外した。

「真人少年。君は喧嘩を売つていいのか？」

来ヶ谷は若干怒りを覚えた様子で尋ねる。

「ス……スイカが……スイカが来ヶ谷になつちました」

真人は心底驚いた様子で言つた。

「なるか！」

真人の背後に、鈴の飛び蹴りが炸裂した。

その後僕達は普通にスイカ割りをして、スイカを割つた。
そして割つたスイカを皆に配り、皆で食べた。

「おいしいねえ……スイカ」

そう述べたのは小毬だ。

「うん。スイカもなかなかやるな」

鈴も同意する。

「いやー、こいつやって皆で吃べるのはおいしいですな」

スイカを食べながら、葉留佳。

生きていたのか。

「おや。理樹君、頬に種がついているぞ。お姉さんがとつてやるわ」

来ヶ谷は僕の頬に手を伸ばす。

「え？……いやいいよ」

僕は自分で頬を拭い、種を払つた。

「いい天氣ですねー」

クドはそういつた。

太陽はさんさんと輝いている。

「本を読むのもいいですが。皆さんといつやつじー一緒に緒するのも、
なかなか面白いです」

美魚はそういつた。

「もう一個貰つていいか？」

真人は自分の分を完食し、余りに手を伸ばす。

「真人、お前はいつたい何個食べるつもりだ？」

恭介はそう効いた。

「そりゃあ、あるだけ」

「まったく。真人も困った奴だな」

そういうのは謙吾。

台詞とは違つて、顔はほがらかに笑つている。

僕達は、僕達の海を満喫した。

楽しい時間は早く流れ、日は沈み、夕方になる。

夕日が沈みかけた海というのも、なかなか趣があつて、綺麗だった。

「さてと、そろそろ旅館に向かつか」

恭介はそう切り出した。

シャワーなどで砂を落とし、服を着替え、ワゴンに乗り込んだ。

車で数分移動した先に、旅館はあった。

建造から何十年は経つていそうな、木造の古い旅館だった。
修繕を施されている様子もなく、あまり綺麗とは言いがたい。
僕達は学生だし、そんなにお金を出せるはずもない。
この程度が丁度いいかもしれない。

それに、皆といればどこでも楽しいに決まっている。

「よし。じゃあ入るぞ」

恭介の声と共に、僕達は旅館の中に入った。

旅館で受付をし。

「それで、部屋割りはどうする? 一人一部屋なんだが」

恭介は皆に訊いた。

「普通に男女でわけるべきじゃないの?」

僕は訊いた。

「いや。お姉さんは理樹君と同じ部屋でも別に構わないぞ
そういうのは当然来ヶ谷。

「まー。理樹君なら人畜無害そうですね」

そういうのは葉留佳。

「そつだな。」これは公平に、くじ引きで決めよ。

恭介はそつ言い出した。

「待つてよ恭介。何かあつたらまずいよ」

僕は恭介を止める。

「理樹、このメンバーでなにかあると思つか？」

恭介はそつ尋ねる。

確かに、何かあるとは思えない。

結局、恭介の言つとおりになつた。

くじ引きの結果。

葉留佳、来ヶ谷

「ちつ。外れたか」

来ヶ谷は舌打ちする。

「そんなあ～ひどいっすよ姉御」

涙目で葉留佳。

真人、謙吾。

「……どうしてこうなるんだ？」

嘆いた様子で謙吾。

「なんだよ、俺とじや嫌かよ？」

小毬、恭介。

「俺は神北とか」

「ふえ……私が恭介さんと……」

「俺とじや嫌か？」

「いえ……別にそーいうわけじゃ

小毬は頬を赤らめている。

クド、美魚。

「美魚さん、よろしくお願ひします」

「……たまには殿方と同居してみたかったのです」

美魚は残念そうに呟く。

残りは当然。

僕、鈴。

「あたしは理樹とか

「僕は鈴と……」

同じ部屋か……なんというか、心臓が持ちそうに無い。

僕達は部屋に入った。

古い旅館なので、当然和室だった。

窓から眺める眺めは、緑が多く、秋に来れば紅葉も楽しめそうである。

テレビは備え付けが一台。

和風の丸い机に、和室にあつた、足のない椅子。

「良い所だな。 理樹」

部屋に入った鈴はそういった。

「そうだね……」

僕は相槌を打つ。僕達は荷物を下ろし、部屋で寛ぐ。

「今日は楽しかったな」

「そうだね……」

「こうやって理樹と一緒に泊まるのも久しぶりだな」

「そうだね……」

「さつきから理樹は、そうだね、ばかりだな」

「そうだね……」

僕は上の空だ。鈴と同じ部屋か。

気が落ち着かない。

安心しきっているのか。

鈴は僕と同じ部屋で平気なのか。

僕のことなんて、ただの兄弟のようなものとしか思っていないかも知れない。

しばらくして、携帯に恭介からメールが来た。
内容は、七時に宴会場に集合、だらうだ。

そこで食事を食べるのだろう。

僕達は宴会場に集まつた。広めで、本来宴会などを楽しむところだ
るべ。

僕達は席に座る。

しばらくすると、ここに女将だらう おばさんが現れ、何人かで
食事を運んできた。
食事が用意される。

僕達はコップにジュースか、麦茶が注がれる。

「今日は、我々リトルバスターズの修学旅行だ。皆じやんじやん食
べてくれ」

恭介はコップを持ち、「乾杯!」といった。

僕達はコップを軽く当てあう。
和食だ。

刺身などもあり、つまんでみたが、普通に美味しかつた。

僕達は、しばらく食事を楽しむ。

「恭介！こんなものがあつたぞ」

真人が宴会用のカラオケ用の器具を運んできた。

「ほう。粹なものがあるじゃないか」

「はい！神北小毬歌います」

小鞠は立ち上がり、マイクを持った。

「曲名は、北の国から三千里！」

小毬が歌いだした。

僕たちは手拍子をしたり、歌つたり、なかなか楽しい宴会だつた。

僕達はお風呂に入った後、恭介に言われて外に出た。

「肝試し？」

僕は尋ねた。今僕達は墓場の近くにいる。

「ああ。夏といつたらやつぱこれだろ」

恭介は説明する。

「三組ずつに分かれ、指定のポイントまでいって指定された物をとつて戻つてきたら、ゴールだ」

「けど、一人余るよ」

「それは脅かす役だ」

僕が訊くと、恭介はそう答えた。

「恭介氏。その役割、是非とも私に」

そう名乗り出たのは来ヶ谷。

「じゃあ、来ヶ谷で」

「御意」

「来ヶ谷さんが脅かす役ですか。なんだか、とても怖そうです」
クドは震えている。

僕達は三組に分かれた。

僕、鈴、小毬。

恭介、葉留佳、クド。

真人、謙吾、美魚。

30分の待ち時間（脅かす側が仕掛ける時間である）の後、僕たちは出発した。

「まずあたし達だな」

「鈴ちゃん、怖いよ〜」

小毬は怖がっている様子だ。

夜の墓場は、まだそれだけで恐ろしいものだ。
しかも、今回脅かす役は来ヶ谷だ。

僕だつて怖い。

「ひいや。なんか今声がした」

墓場の奥からこの世のものとは思えない、奇声が聞こえてきた。
小毬は振るえ、僕の腕にしがみ付く。
胸があたつている……。

しばらく歩く。

「理樹……なんか燃えてる」

鈴は僕にそういった。

墓場の奥で、何かが青く燃えていた。

まるで人魂のようだ。

「理樹……」

鈴も怯えた様子で、僕の腕にしがみ付く。
胸があたる。

両腕に胸があたつている。

なんておいしいんだ……肝試しつて。

しかし、来ヶ谷さんは短時間でこれだけの仕掛けを用意したのか。
つくづく凄い人だ。

僕達はしばらく歩く。

僕達は目的の場所まできた。

墓の前に、印となる、旗が刺してあった。

そして、その前には、来ヶ谷さんと思しき後ろ姿があつた。

「来ヶ谷さん？」

僕は疑問に思い、声を掛ける。
だが、反応がない。

「来ヶ谷さん」

僕は肩を軽く揺すつた。
と。

首が落ちた。

地面に、首が転がる。

鈴と小毬は悲鳴を上げる。

僕は何とか落ち着き、目印の旗を取り、一人を引いて帰り道を戻る。帰りにも様々な仕掛けがあつたが、僕達はなんとかスタート地点に戻つた。

「はう〜怖かつたよ〜」

「あたしもだ。理樹がいなかつたらダメだつた」

二人は困憊した様子だ。

「理樹は平氣だつたのか?」

「え、ああ。別のことには気がいつてたから」しばらくして、後発の二組が戻つてくる。

帰つてきたのは美魚、真人、謙吾。

「なかなか壯觀でした。大の男一人が抱き合つて震えている様は」美男はそういつた。

「ふん。なさけない奴だぜ」

胸を張つて真人。

「お前もな」

最後に、恭介、葉留佳、クドチーム。

「恭介さんがいるので平氣でした」

そうクド。

「クド公震えてしがみ付いてたくせに……」

そう葉留佳。

「あれ。来ケ谷はどこだ?」

恭介はそう尋ねた。

どこいったんだろう、来ケ谷さん。

「探しにいくか」

恭介の提案で、皆で来ケ谷を探しに行くことにした。

来ケ谷の名前を呼び、僕達は墓場を探索する。

人影が見えた。人影は走つていった。

「来ヶ谷か？」

僕達は人影を追つた。

だが、人影は消えてなくなつた。

僕達は仕方なく、旅館に戻ることにした。
旅館には既に来ヶ谷がいた。

「どうしたんだ。遅かつたな」

来ヶ谷はそう尋ねた。

「お前、墓場にいたんじゃないのかよ？」
真人は訊いた。

「とつぐに帰つていたが。それがどうした？」
来ヶ谷はそう答えた。

だつたら、あの人影はなんだつたのだろう。

「なに。あそこは墓場だ。靈魂が見えても不思議ではない」
来ヶ谷はそういうた。

そして。

僕達の肝試しは終わつた。

僕達は部屋に戻る。僕は鈴と部屋に戻つた。
部屋に入ると、二人分の布団が用意されていた。
時刻も遅い。

もう寝る時間だ。

皆肝試しで疲れただろう。

これ以上遊ぶ気力もないはずだ。

「鈴、寝ようか」

「そうだな。寝よう。理樹」

僕達は布団に入った。

布団に入つたはいいが、僕は眠れなかつた。

隣には鈴がいる。眠れるわけがなかつた。

寝付けずにただ布団に入つてゐる時間がどれだけ続いだらうか。

「理樹」

鈴は僕の名前を呼んだ。

「鈴。起きてたの？」

「どこかに行こうか」

鈴はそう提案した。

こんな遅い時間に既に断つもなく外に出るのは憚られたが、寝付けずこここここるよつ、夜の散歩を楽しむのもいいと思つた。

僕達は歩き、結局海に出た。

昼間と違ひ、夜の海は寂しく、悲しく映つた。

「……理樹。理樹はあたしのことなどをどう思つているんだ？」

唐突に鈴は尋ねた。

僕はすぐこは答えられず、心配する。

「あたしは、理樹と一緒にいると眠れなかつた。あたし達はずつと兄弟みたいなものだと思つてたけど、そつじやなかつたんだな」

「鈴……」

「あたしは、理樹のことが好きだ」

鈴は僕にそう告げた。

僕は、何の迷いもなく答える。

「僕も……鈴のことが好きだよ」

「おかしいな。前にもこんなことがあつた気がする」

鈴はそう呟き、

「……なあ、理樹。キスしないか？」

そういうてきた。

「けど……」

夜の海とはいえ、誰かがいるかもしねない。

「あたしとキスするの、嫌か？」

「嫌じやない」

むしろ、僕は鈴とキスがしたい。

鈴は僕の頬に手を添え、顔を近づけてきた。

僕達は優しく唇を交わす。

と。
がしゃ。

と、何かがゴミか何かを踏む音。

僕達は慌てて唇を離し、振り返る。

「あちゃ……ばれちゃつた」

ばつが悪そうにいったのは葉留佳だった。

「お姉さん大興奮だつたよ

そういうのは来ケ谷。

「やつぱり、リキと鈴はカツブルだつたんですね」と、クドは納得したかのように頷く。

「一人共、破廉恥です

と、美魚。

「一人共お似合いだよおー

と、小毬。

「見せ付けてくれるぜ

と、真人。

「まつたく、妬けるな

と、謙吾。

「鈴よ……ついに大人への階段を登つたか

最後に恭介。

「くう……お前等あ！」

鈴は吠え、怒りを露にした。

「落ち着け、鈴。俺達はお前達が出掛けたのを見て、心配で後をつけてきただけだ

恭介は弁明する。

「つけてくるな！」

「まあ、それより花火持ってきたんだ。皆でやるいば

恭介はそう強引に切り出す。その強引さにベースを合図せざるを得なくなる。

「綺麗だねえ」

小毬が持つてているのは閃光花火。

「はい。綺麗ですねえ」

クドも同じく閃光花火。

「風情がありますね」

そう美魚は呟いた。

「後片付けはちゃんとやれよ」

恭介は皆にそう伝えた。

「男ならこいつだぜ」

「ああ。こいつだな」

真人と謙吾は、一番大きな打ち上げ式花火を設置する。

「まったく、飛んだ邪魔が入ったな」

鈴は残念そうだ。

「はは……けどいいんじやない。僕達らしくて」

こうやつて皆でいて騒ぐ方が、一人だけでいるよりも楽しい。

「そうだな。この方があたし達らしいな」

鈴も頷いた。

僕達は今の状況が幸せだと思える。

「行くぜ！」

真人の声と共に、打ち上げ花火が点火される。

空に綺麗な花火が咲いた。

そして、僕と鈴は手を繋いだ。

Fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9428m/>

修学旅行

2010年12月6日13時52分発行